

121 肺癌を含む重複癌症例の検討 (北大第一内科) ○石黒昭彦・方波見基雄 原田真雄・宮本宏・川上義和

目的、対象：昭和42年1月から昭和61年12月までに当科に入院した肺癌を含む重複癌は25例であるが、今回、最近10年間に経験した20例について検討した。結果：症例は男性15例、女性5例(男:女=3:1)。年齢は48~78才で平均65才であった。肺と肺の重複は3例、他臓器との重複は17例で胃(7例)、前立腺(3例)、子宮頸(2例)、甲状腺(2例)が多かった。

第1癌より1年以内に第2癌を認めた場合を同時性、それ以外を異時性重複癌とすると同時性6例で、異時性のうち肺癌を第1癌とするものは5例、他臓器癌を第1癌とするものは9例であった。

肺癌の組織型の分布では扁平上皮癌11例腺癌8例、小細胞癌4例であり、扁平上皮癌が多かった。他臓器との同一組織型腫瘍の組み合わせ例は4例であった。肺癌の病期はⅠ期3例、Ⅱ期6例、Ⅲ期7例、Ⅳ期4例であった。

第1癌と第2癌との間隔は、1カ月以内から21年まで、肺先発では平均2年、肺後発では7年と肺後発の方が間隔が長かった。2親等以内の癌患者は2人以上が3例、1人が7例であった。

また、当科における長期生存の肺癌症例の死因を検討したところ扁平上皮癌7例のうち3例が他癌によるものであった。(大腸、食道、膀胱)

以上より担癌体は喫煙の影響の他に癌になりやすい素因があると考えられる。

123 肺癌患者における重複癌症例の検討

大阪市大放射線科¹、国立療養所近畿中央病院内科²、同 病理科³、同 外科⁴
○西岡雅行¹、水口和夫¹、小野山靖人¹、荒井六郎²、河原正明²、古瀬清行²、山本 暁³、井内敬二⁴、森 隆⁴、沢村猷児⁴

目的：肺癌患者の中の重複癌症例を解析し、重複癌の比率、重複臓器を調べると共に、第2、第3の癌の早期発見方法について検討した。

対象：昭和51年から60年の10年間に国立療養所近畿中央病院にて肺癌の診断治療を受けた1,972例

方法：重複癌の条件として、1)悪性腫瘍の既往歴(臨床的に転移性肺癌と考えられるのは除く)、2)肺癌診断後、他の悪性腫瘍の発見、及び、3)手術、剖検による重複癌の診断 のいずれかの項目を満たすものとした。

結果：対象症例中、重複癌は125例あり、肺癌患者全体の6.3%占めていた。肺癌と他臓器癌の重複は111例にみられ、胃癌との重複が29例と最も多く、次いで喉頭、子宮、乳腺の癌の順であった。一方、肺癌と肺癌の重複は17例にみられた。癌の発見された時期をみると、1年以内に2つの癌が発見されたのが40例で、残り85例中、肺癌が先行したのが18例、他臓器癌が先行したのは67例であった。

考察：癌の重複臓器として、胃の様に本邦での癌発生頻度の高い臓器と喉頭の様に同一器官臓器の占める割合が高かった。肺癌患者の約85%が死亡する現況を考慮すれば、今回示した重複癌の比率は高いものと思われる。今後、肺癌治療症例が増加するに伴い、第2、第3の癌の早期発見の重要性が高まると考えられる。

122 肺癌含む重複癌及び肺の多発癌 —日本病理剖検輯報(1958-85年)による検討— 浜松医科大学病理学教室 ○森田豊彦

目的：母教室剖検例の肺癌含む重複癌につき第17回本学会の要望課題で、第26回本学会で日本病理剖検輯報(1958-82年)の肺癌含む重複癌につき5年区分で推移を報告。今回は10年区分して、肺多発癌の検討を加え報告。方法：日本病理剖検輯報第1-28輯(1958-85年度)に記載された年齢・性別の明らかな全ての重複癌症例につき、悪性腫瘍の種類、主と従悪性腫瘍を決め、肺癌例については組織型を含めて検討した。結果を10年区分(第3期は8年)してその推移をみた。

結果：1. 全体の傾向 28年間の肺癌含む重複癌は男性3023、女性925例ある。3期は1期に比し男性16、女性20倍の症例がある。全重複癌中肺癌含む症例は男性28、女性17%を占め、胃癌含む症例に次ぎその約65%の頻度。

2. 年齢分布 この期間に肺癌を主及び従とする重複癌症例に男女とも60から70才代ピークへと高令化があった。

3. 肺癌を主とする重複癌 相手の従となる癌は、男性は胃、前立腺、肺癌、女性は甲状腺、子宮、胃癌が多い。肺癌の組織型割合では肺単独癌に比し男女とも扁平上皮癌と小細胞癌が多く、腺癌の占める割合がやや少ない。

4. 肺癌を従とする重複癌 相手の主となる癌は男性は肺、胃、肝癌、女性は胃、肺、胆嚢・胆道癌が多い。組織型割合では腺癌、扁平上皮癌多く、小細胞癌が少ない。

5. 肺の多発癌 28年間に男性247、女性32例の多発癌があった。男女とも3期及び70才代が多く、組織型では主の肺癌には小細胞癌、従の肺癌には扁平上皮癌が多い。

124 肺癌を含む重複癌症例の臨床的検討

国立療養所沖繩病院外科¹内科²

○川畑 勉¹、前里和夫¹、国吉真行¹、石川清司¹、山内和雄¹、源河圭一郎¹、玉城和則²、宮城 茂²、宮国泰夫²、久場睦夫²、仲宗根恵俊²、大城盛夫²

目的：重複癌の臨床上的の実態を知るため、国療沖繩病院における肺癌と他臓器癌との重複癌症例及び原発性重複肺癌症例を検討した。

対象：1980年1月から1986年12月までの7年間に経験した肺癌を含む重複癌症例を検討の対象とした。重複癌の診断基準はWarren & Gatesの定義に従った。

結果：肺癌総数は797例でそのうち肺癌と他臓器との重複癌症例は19例(2.4%)男性14例、女性5例であった。原発性重複肺癌症例は5例(0.6%)男性4例、女性1例であった。他臓器との重複癌症例のうち肺を第一癌とする症例は9例、他臓器を第一癌とする症例は10例であった。そのうち同時性は7例、異時性は12例であった。原発性重複肺癌症例中同時性は4例、異時性は1例であった。他臓器との重複癌症例の異時性例の発現間隔は平均5年6カ月、原発性重複癌の異時性例の発現間隔は3年3カ月であった。他臓器癌の発生部位としては胃癌が5例(26.3%)と最も多く、喉頭、子宮、膀胱、直腸癌が各2例みられた。組織型は肺癌では扁平上皮癌が24例中16例(66.7%)と圧倒的に多かった。他臓器癌を含めた組織型でも扁平上皮癌は22例(44%)と多く、次いで腺癌が13例(26%)であった。肺を第一癌とする重複癌に於ける肺癌の臨床病期はⅠ、Ⅱ期が多く、他臓器を第一癌とする重複癌に於ける肺癌はⅢ、Ⅳ期が多かった。